

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
LICENCED PRODUCT
© The Hiten Company, 2000



713
3011
7



いはは文庫八編序



遠く中をれひま初長 郭玄

遠く中が舊友指の美津は喜ぬの地

志く今編の出板を待たし一の章なり

斯い志願を遂るものか喜ぶるも不

学の早純く外類のなまかたは文字

再出 塩谷判官高貞



秀當の幼少ゆゑ秀丸と
いふとより小世と



つとめけるが或と死花檀お
標の死居ると見分け
子供を捕へんとて此のまへ
ながら我も此花の心象あるり
跡もも迹さんやと余念もあ
返さず所と判友友をまのい
幼少のゆゑ我と主人とあり
ての一言ふんありと
揚ひーが果して後子義士の
群あいらくさる

小の寺
野寺
房丸
後

改て
藤室門
秀丸



の中なる者人が挑灯の火ふきうらんで「コウをさ
 誰なる強八トやアねへり「エ然うは作のい浮森をの
 若且形う子「コレサ若且形うでもあるめへトやアねへり
 あり「あーがあるうト云ひなぐう等とあうさめてゆう
 といで「コウ等登演の若までと頼んどけきどもは
 とは男不用があるうう友切てゆて呉ねん是で
 酒代もあるらうト包う金と渡さあぞ「へい是
 へ毎度お難ふとさおまきてお振るふか「難うトと

云ひ「等登のいぬりゆ「然んは「強八が「モシ若
 且形九を所さる今秋アはと家のせくるがあり申す
 う私へのか「あま「何年明日のともいあり申す子
 仇「コレサまこ様と云ひおをせ何ゆでもよあふ違ふ度お
 せ明日の明後日ごとと解らねん「過るう人とする麻
 みるる由縁があるアな若い「ゆとするでもねんが自己由
 先「陸路の若を夫強依おあつが「糖り「息子何不足の
 ねん身の上由一昨年自家の大夏う「親又も自己由流



理屋のあつめくろ「そりやアを依るぞけきどもさの
女よりはかきよめて性やせうう是まて三年越しと
りの音しう嫌しう女のあつむうと招て世人あふ
やうあつむうわ人婦女今を亭主が後と切て死ふとする
場合ごめのと自己も同極みぬ是れ性で性居と如こ
あの遠わくそれと被是らつことろが通も出のつ付
やせんかあさんもおごらう一旦筋うとさる女とあひ
もとげきよむ仕舞ツちやアに傍の由を若サねぬまこ

いやは上六

かあさんうう那社までお頼まされて出させと金も
伏どろけいまんまでの海されわ人毒と喰らひまてごア
寧ろのくささか氏めが今ふもあ人來ころうバ木の勝
まぎれと幸ひお無理性生ふわの片ら主人あひとか
えらする世人中然うあころう人を連て招つて
控女お賣ても幸いつおいの身の代りまさんごうら
飛着てもあり中をめ人然うおららあ向ううあねく
人の来る是者大うこお氏お遠いあるめへはと人あんで

けうしてト叫き示せば仇は所由白きるれはうち高良
從ふ小蔭不立膝まで埋伏すとも毫不知ぬか民の
高ふ湖平たがかの遠書ふうち讀き良吏の氣を
知るうへの息あるうち不今一月遠ふてをいともあり
寢殿の秘とも足まわりと家のうちとが近出せしが
昨日の月をたやのてえさ人いと曇り務は元とも
是へかうぬ別ぬ秋及も女の一念を一と勵ましつ
南とさうてゆく秘不更ゆく風の紀をく脊中へ入

いかに八上七

兼松が眠里もやと泣物まをとりあげなぐり母扱が
下、重うらうノウ今不寢うはと性くとお父さんのおま
のところどううかとううか脊中へ推付て居るのどヨ
下坊強いら泣のちないヨを繋りお父あやん如人様さ
先んかまの狼見と貫つてお共ヨ下ヲ貫つてまゐるまへ
まゐりけれどあの狼見でお父さんハト行らひうてせき
あぐる泪とちふきさむ巖。ウント一歩伏しまろべ
まアレ物と泣のど人坊かとなあゝ志ゆりうまゝか父

ちやん処人連て性てか其ヨウト替員りまらざる首
さう伸べ母の泣歎祝く子の死お性する又祝を知て
案どうを根とあへいとも然しさと又若しと不稍
須臾起もあがぐて居らうーが性ての良妻の良のうち
み遊ひ付くるりもあうらうと廢とあさ入券の子と替
なぐらふまわらう家とむと励まう一町行てい息とつ死
二町行てい狗と控あうて及の程えや二里なるりも
春よりしごまごを以い徳念も替あれたるりも家並の

今のどくお務りねばい人家が由経果てあまき本と
うるまの生ひ死りうのころうおま教申るればいあ人
あはる人もあうざればおぬさもやうんと良妻の一生想
今とあ人の情さゆらちあまはれ由性んとする物由小
後と知るいあ法の法八か氏の希人端もごうり「ヤイあ
輝アらんけおあうわく大獲うとあやアうらみあし自さ
はあぶれてのうらうらて居る健命ご先別思んであう
ちらりうとあう見付ころう今教アてのきりあはたとあ願

然るに解て来と是れ母とと冷せて居て其を幼きと
まもりわくで試せるの目と扱てばいととまきれ
ちやア強ハるゑの徳が干ら多喜ひ今秋も茶と世往
とあてきらうとと然れども一知もとらうとと是れ
その方へまうめやアなうわくまふ結ても然らぬ小坊主
小児ぬいぬが乳くるト狭くお氏と推居て脊中ふ入
まてつる急松と抱ふるまうふふふさのり材布と
とふふ引物せばアア結てトまらうつくお氏の後ろ人

仇九郎が扱足あつて思ひよう抱きつうれて又物
コリヤ物さといひなううりなるさんふも男の力
御もなうりんくふけり

第四十四回

高下強ハるゑの徳が干ら多喜ひ今秋も茶と世往
あまもまて冷ひせて居るこのゆき思ふととらとと
網城で書つととお屋どアそれとふようて先比つうり
且取のお世話あるわくととと破くくとと那後まで

宛ッ口鏡つまもめてゆゆをみわへのころもて自むが
備ひよ殖物されちやアオ一且ぬ人象が候わへ今う
むと切替て且ぬのか世活ふなるうよりまごまの上
ふ由性と強アア且ぬ人の、う次よは兼松めと
王教までぞハテ教しことと象が物知うう点のお
人ゆあるゆへ返るうう遊いと妙うするそト注叶ハ兼
松と小孩ふあううと撥抱き榮探のぬきまを堅め
おんとするふ場うね氏一叙又えんそのやアあんまうる

いひは上十

私ガ今世近物一ふ欠落どころのうでいまい遊平を
さんのか今の終ぬらちみと此のせ途申その子と
春葉ひ材亦まで返ようけてわろのころつらぞんぬぬ
い人ふ世活よされよ物うぞまよひまきぬ殺させぬト
まうりあうんと身とゆぐと程ゆあうり物まきぬ「コレサ
かぬ由性あな考ぞぞと強まてふらうて飛る象のかみ
まごう人が可也ひかぬのまごのものを放させて見えて
えんて居るゆのう那子と不後とらうう後とゆらうん

今更で何物して是ト引寄せてお民の新人お白
摺付まぐろかきお民のお民のあまりのに情さ小松先
あつめ必死の覚悟かねて准備の難力を抱うとた
らも引のまをて実うはう入のトまひつ由実てか
仇九郎の又の光るよ身とかいそのまをてか
あげつ強う白又とめきとま一「ゆをさせてと
籍くお和信くら小松つけあがり女の癖小又抱
ざんまの形ううううの遠方由あをぢ吾意をせぬ

母は性生奴又女のあでい先念ぞが書と屏風
新物形うしてきう六抱あがりたを急念頼ゆあ
くまのいかなはふをまんとするわし由本之の産ふと思
びて最茶うりのありさなとゆきを渡す一個の武士
あまりのるひお見えねてやかどり出り仇九郎が襟
杜んで引籠一どろと投出きて拳のたまう
るより強ひの小松おかく一氣松とを産を
腰小准備の長刀と抜きすうと吹かると彼武士

りともせむ那知遠知もがきり遠いしおつ又と
蹴落しつ狗づらぬく引居りて遠方小倒れ
仇た所が落さる又と拾ひとりおともりげん後りり
おてかると引外しまて突かると身とさけて利
腕あつろとぬとめつ右とたふふ忍漢と引付さるふ
冷笑ひ 女考かむ性来あてかよととくして世法の
修二個と由小搦捕り及及敷を及由するぬまれど
おとてゆとぬむふあわねぬふ小あての用様も致さる

いろは八上十三

汝等命と憐く名りて棄ひぬる材布の金と先
女中へ返せりく飛長非及のりひりせ余をくが
交して伴下と云りて語八若げふ下せんかうふ
きつく繕らまぢやア息うつまうておご云りまぬ金由
命があつてのり人憐いのごごこと十あ返してきるハト
投知を材布或士のりんてか氏ふむひ下女中定めて
發つれつえん怪おがぶるくして先い金巻を返してる
を材布中改めて請ふまよトのみふお氏い焼しこと



他九所と強ハ脊中ふりぢひ肌み抱きこも下めの
勢ひ引勢を西宮ととて先みまをぐわだ格ハ是
と進ましくまぐちを先見ちの大門まで来さう
まうがひ民の速く由脊中とありてかの急松を抱き
と強ハと仇ハ所ハあひだ一息ホツトつきたて由
んぞ不迹仍あぞた格ハち門とらち鼓き決急の
るぢあてまうこれバ役傍ぐふお目よからん先は門と
めらまよトらふ門支眼と先一格ふ急より教

きし物門番今教のあし子細あつて何れゆふか人が
こころを由心む門とめらなと由傍方う者い云け
用があつたおまなれ蘇れまふ貴ひ由あれと残之文
ふ由あつたのふなと今教の記されては急の教と格
し由おねくまらうとまやとに小言まげらるゝ急と引とて
うとた格ハ格由引返し一由傍の急をでめぬとあつた
毛派由ま今が問とたるのあり今宵急急の浪人
あて急洲平をとりふ急がはちうらん急じりし門一されむ

その湖平たが今より二肘袖の糸火急の羽子で厚
裏まで縫うと熱く敷くと門を鳴させ陸長殿の墓
の前で後と切つて死との人の門の大踏ぎをそれどふ
うつて又他より後を由切よある人があつていさぬと
當房が震しく私に云はれて六肘が鳴るねば鳴させぬト
泣く小孩くた揺よりお民の守由よめおれぬおひ
うつひと声ひきと依して生解由るれありさぬ衣
はこふも又た理ある

徳て小織た孫の門あつと種と倫し一のあ傍と
鳴りて終由子細と尋ねり人お民がうと由後し
が中縁の末とあつうういとて湯と門と扉をせりまど
お民の墓にお赴きて自ら支の死骸お抱き付きて返
らぬりなど縁かきと熱敷ゆさどてうる人けとご由
うづくしけまが後不漏しり着友よりしと根を
へしそと死か民がむせいのあやうたよ由深深と死と
那達葉おひ通してを場をて髪と切りらぬ衣の

騷と俗僕ふふ是ちの中ふ蘇りて沈念以ふを
昂ひけるゆへに後た孫が主人物来度より衆を
召し初め技打ると揚りしは成長の久し
せり是再び蘇の如きと云ふは孫が技打り
といふとも是孫の如き湖平たしか民が忠臣
をんとはははははと云ふ

正史 実傳 いろは文庫卷之廿二

江戸 為永春水著

第四十五回

正史 実傳 いろは文庫卷之廿二

愛小大星流たあつと奥の近江の玉月佐木性
家来よりしが後小堀家小堀をせられて狭
小負の長となり又是義士の一個なり始末を
ありし頃い百二十石揚りて使事と初しが
世とをていまは書入むる不徳なるい生け

七もでも旦那が頂戴の金と一文も持さぬを
持て往けと申すは忍びたが忍びいらす金あり不足
どがばか金と配分して尚季のどころの海せぬと
ゆふとどろどろ然りみて仕舞ふと正月よなると
ゆふの小旦那の心おづらひがと文なるとも海むゆ人
とやあるまのうまふまど解もか揃ふすつと思ねるも
や門松もまうて居ねくでい元日おゆらりよとめ人
皆の危のぬい知るねくがば才がゆふのどころでい七段の分の

金のうちと二かど旦那のお小妻ひき分て縁と揃せ
かすお門松と注連勝殿のみと一袋お徳川の鞋の
一本もあつたら正月の御参りであらう是とどろつと
そ分引と甘まう青やさんと八百屋さんと洗濯婆
さんの掛のうが倦いううは才等と一組あいらうかす
ゆふの掛のうが倦い切と結金の六あ二か斗りと
古手屋さんとちあは身等がぬ人でいといての物
指であらう子まき一なる徳米屋さんのとねるあり



まゝに金言面をか徒らよのうて後入ませう
あつきの伝志の別て辱まいが掛方不
ふと箇板小致して異ていりあく家の毒
なふたつて異りたま 業
小対して海をせんうそれにか絶め
金とをみてあつきの文の書付と
物せが仲不申新屋の世と
金言面をか徒らよのうて後入ませう
あつきの伝志の別て辱まいが掛方不
ふと箇板小致して異ていりあく家の毒
なふたつて異りたま 業
小対して海をせんうそれにか絶め
金とをみてあつきの文の書付と
物せが仲不申新屋の世と

わらは八中

らゝい紙とちよくも今一寸仕方まいが
片の紙面の鹿ふ白いところ
でもするが宜い。ナニ振とあ
足取のハ家来丈不性なる
練ても知まことりのご今日
身が張つてもをせりけ
切法まぞいなが屋うない
中幸始のお家板の
わんし 幸家 板の
ん せり け
まぞい なが 屋う ない
お家 板の
ん せり け
まぞい なが 屋う ない

しとせ福身どくみんでい居いりましまさすわねわねなりの
あつあつりまりまつとつとあつあつてい居いりますすすとと市いち言ごんふが
どよぞ致いたしと伏ふろ子こ「然しかばサ那な考かうのの家け方かたへも別べつ
然しかよ出で入いりとと「ままままままががはは男おとこ素もとつてつてままううままああのの
大おほ星ほし極ごくのの室むろ小こ結むす搦なるる且かつ形かたちででどどおおままままがが情なさけいいるる
ああのの田でん務むをを向むかがが不ふ知ち合あのの田でん極ごく子こ更さらととままううままががねね
福どく身みん更さら何なにももおお妻つまがが大おほいとと素もとりりまますすうう何なに卒そと
田でん内ない室むろささななととぞぞんんどどままりりてて由よし形かたちおお怪あやしいしい且かつ形かたちどどううら

1508 十

私わたくしううののいいららひひ御ごああいい何なに極ごくりりまま君きみのの田でんににううり
おおままめめをを放はなてて田でん説せトトてていいととああひひ入いててままりりままんん由よし
私わたくし由よしをを行ゆささななとといい田でん同どう没ぼつととままりりしし跡あとああのの格かく別べつ田でんをを
易やすくく致いたささるる何なに卒そと田でんおお妻つまなな田でん縁えん女によ由よしああるるああらら
おお世せ活かつとと由よしううとといいととああつつてて居いららままううななれれババ成なり後ご
そそのの方かたののままううをを処ところ理り不ふ使つかへへつつがが然しかししてて誰たれぞぞををああららのの
女によ中ちゆうででももああるるののううととままりりししらら金かねががででどどおおままままでで大おほ
田でん内ない室むろのの田でん内ない室むろああのの若わかききのの女によででいいままりりくくああららいい入い

ますまのそとに種とあねまゝにさかひ南玉田
の七士小湊田後内との人の娘年十七で容貌
よよく仕度もお整ふあるとのるむでござりまするがそ
とより後内との一人が武術の達人で娘はふも幼雅ときより
雑刃と教地と地が今もア親公も負ふいまひ人
ふりつことりみとでござりまするを以て親公のそいまる
あい假令先の困窮でも娘と之合つてお務仕の男
とが舞ふおやうと云ひけるそらでござりまする

あはれ申十二

水の容貌と見えぬおれもくと名を以てして舞ふ
まらうとするところか幾人控つてもお負てまご縁
付むお居るとまうさるでござりまするさく
まうさるませんが遠方の山家中振う由か二個
むり之合ふに出のか方由あつとそらでござり
まてがそ方由負てかゆんり城とと落し承り
まてと丈丈利の娘はで由郡と娘の山々の門なる
物の遊作もあつまいとあつとまけんうまては縁が

結むすびまがま寔まことふつひ一對ひとのこ支し婦ふとかのか目めとまままてがははり
たた物ものでごごごああまませせうトままりしままてうう私もまままひひの
縁えんとぞんどと友実まこといまるるであらうと伏サハテ子
ままのめららしいかいでごごごああままんん縁えん後ごのるうい免めん由ゆ
角かく由ゆ娘むすめまま支しごごけけはは雑ざつ刀たうと仕込こと後内うちとやりの武ぶ
術じゆつの程悔くうとああのまままををねねい私ははのゆ由ゆははななかかのあり
武ぶ乃のいい免めん心こころの伏友とも何なに卒そつ知ち己おのれままでゆううつてををささい
りのでごごごああままををてて一い筋すぢううららいいああのあららうう市いちをを来きと

子こんでおねねままと先のねみみと妻一いっくく取とりのううららへへで
をを日ひの沙汰たと致しませせうト全ぜん日ひの列目めとて海うみにのりりが
徳とくと五六ろく日ひ程ほどままををぎぎて志賀が菰こもの再びまり先へへも
後ごと吐せせししととああらら明日あしたに出ああららううみみと市をを来き
より中織おせせが某由よし子こ殺ころよりは因いん乃の致しええんといいふ
ふふぞ法たたの由所ところ知ちのうららああてて次つぎの日ああ個こうち連れん
多たと淺田あさ後ご内うちううらら入いりけが縁ををひひ入いりまるるううららに
一いっ万まんの中と撥拂はらひて後ごふふ二に個ことをりりつつ統とて全の後



ちり宛あとの
 空や柳の
 二日の月

八中十三

内由如て對面する秘小是彼の挨拶など辯むる小
終りて後志如實すこ一症と云々して「は秘米在布系
より中入はとるるみつき是る大星法を要し小細
めらしし時せし如縁の義の意由角由号公の由
乃よに飛煉あると云き何卒おん目小をうとて
列ち同乃仕りト云ふ後内うち笑て「是ハ又
心ひあぬを云依拙者由武たの好まされど世ハ
いハ下の横好とやら係なぐる娘あ何卒武たの

いちは八中十に

公をのめる男が持せてきりこいと娘の不於末ハ
余ふふして聲と探む由鳥淵がまふいと定て人の
笑ひませうまのさう星大星氏由武御は執と承
まのりまうとごが一を承るるうまをまのりま
拙者由人並らうく武たのりい編しまた少業ハ
るうく出来ませぬとい人物の御好でござるまされ
作小者さうひの教諭と由承りこひ義でござるおん
「是ハ」痛入とを作私り由おなふとやう

処るまじと年をて仍由の付りて未熟でいおるうま
すまじと雅と一た刀かを合せとりの小例うう志が
「るの後を義由市あおるう承りつて承りまされ
いざ大星氏は息女と一試合致されよト是れめらして
吾とも云りまら素ううおふらんぢやくせぬ生ゆゆ人
清なるついのまの禱ふ陸ひしるはる門由飲びて聴て
祿考古場へ付ひつ娘ふも仕度させ試合の場而く
連来りかめあ個ふ引合せて「是れが利ちな茶の

五中申上

雅名と續しほびまうて田舎育の家終老か目を
らきてト云ふ種小法な事由志賀三郎もは續由從小
初對面の挨拶も終りしうは後内の美雲小白本作
其の難刀とかなり本た刀と云りおさせ種まき処小絶
合させて奉務負ととの禱のあさうう清なる事とか
續とい一様ううう之對ひ遠方の上版波方へ下版
志ししくと清考せつ互ひ小透と竊か種小か續は
う人淑女う人最優しきふ引合て自然とゆる身の構へよ

法左衛門の竊小強き侮りがうと心ひらうとたうの知れざる
あやめの夜脱何社のとあうべきとヤツトせざる声浪俱ふま
向月づけて打込むた刀とを獲りつと更とを獲と并ふ
とかひらうる花際のとれ働さよ武州を練の法左衛門
争う及ぶるとゆん来十金ようとせしと後がぬふおち
まうらまは終めい有ふあうびうら志賀花の市を来がう
それ言をふと死持してかゝる不先ととせしと最子の毒
あひあへとも今更不詮方う、惟乞えそとく小法左衛門

と引連て登形へゆるたも是等ののりて任しけととも
法左衛門のお屋いと余の秘もろふをう不の受の
あやめもあうりのるとか後がな並と養けつが支ふ就
て由法左衛門の身末熟と保く歎き絶て一色の乳
書と保めすおまを文面あり

私儀は徳田の郷士法田長内法後と申の志と
武州の徳田はは処存外お打負不先と死ん
全く不報煉成とは情き治才よ世に支ふ休

是れむと人ふがが如精の是るるなるべしと再々び
よえん ねが 又三年の暇と乞ふて沃路が如く
針きり えん 今ない初ふ沃路へ今よりふ替古せし
二拾 ふねん ぶりののそ内小原通の若くをえよと
種ふ上違ふされどいまを免符の沙汰をあはれ又一
年の修めと積とてもや進教ひの三年を終るは
ふありとるに或日沃路へ二万の中へ大星と振き
ひと東軍流みて秘ととるの微塵の位とる

とてを他 その 突と悉く皆修りておのりや
符の い 名 ねん 少くは敏ふ由是等の符技と由致す
若くはれども きん 突 えん 殿の えん 田の えん 里 えん あり えん 沃路 えん 田 えん 後 えん 内 えん が
娘 えん 名 えん と えん 名 えん と えん 名 えん と えん 名 えん と えん 名 えん と
近 えん 小 えん 名 えん と えん 名 えん と えん 名 えん と えん 名 えん と
稀 えん あり えん あり えん あり えん あり えん あり えん あり
とて えん 一 えん 不 えん 是 えん と えん 是 えん と えん 是 えん と えん 是 えん と
突 えん 突 えん と えん 突 えん と えん 突 えん と えん 突 えん と えん 突 えん と

我々が秘のこころを流義の名おきとあひし流義と
然と一流の秘密と授けぬ拙者が心を感得し
あつてつらんが偏に流義とせんずる家系とあつて
今の其夜の流義もはては令免律なりとて由
づきふあつてまふ今日初ら得るは久し
と煉て那一大方の秘密とを授けぬ拙者が心を感得し
最念は示されて流義の心あつて冷し
汗をかきおきて授けぬ流義が拙くあつて首とまげ

流義との心教訓で流義の心あつて
その子細い流義の心あつて今先生の流義ありし流義
娘のしけ通りまで名のおへしる名人といふ流義
先年拙者が同没して流義を流義と中流義
拙者が心を感得し流義の心あつて流義の心あつて
男あつて流義の流義とあつて流義の心あつて流義の心あつて
娘は流義の流義とあつて流義の心あつて流義の心あつて
流義の流義とあつて流義の心あつて流義の心あつて



なまらくかあしめ某嬢をなさんといふまを拙者の妻
より武とぬめが薙刀の一振りとも知る妻と妻
んみいをさしき交わり能令が一のを並ありとも
の知まらる女の疲腕つゝ一右刀とむ不将今渠と試
合ま及び一ととろ物のはんごふお負こればそりい人
へ影ひ出さず年の暇と乞あて先生ふは守りかを
尽しと彼れせし身自己獨りのう第あての天晴と速
あつりとむ中法古久はりしとれ後田が家不赴きて

五つは八下六

再び試合ふ及び一ととろ初不整を打負し又三年の
暇と影ひ今夜の命を智て有りともけ一流の乗後と完
ゆ是雅今一夜かの娘と摺負とるまんとむひつめ和
後六年の彼れあてかの一大事の秘密まで授らる
る方飲びの何ふは云んやうゆりめくまふとて被
娘のを香小巻て系妻ふありと死とのをさふ不
らげ主人の耳へのいささるるゆ奈何由一右刀お
ざらうらぬ武士の一分をささる影ひとあうすい後の

今更長まで傳授のうへの然る程と後振舞
べき伏しあわねども思ひ込る拙者が念致の案件
の儀田が娘と今一度試合の儀と申許とるがうと一
若吏ともよ渠小及び遠回も不えとあるまづ
場ふおのて切後河川流養小紙と付る中伏と仕ん
け養備ふ河川海とりふ小沢跡のうち領き我等も
急こ其版の出精並とるどと思ひし由一偏や沙
田が娘など立合ふて由せらるうと今のどくふ

中せしところ思ふ小遠りぬ其版の由思ふ
河川流養小紙と付る中伏と仕ん
け養備ふ河川海とりふ小沢跡のうち領き我等も
急こ其版の出精並とるどと思ひし由一偏や沙
田が娘など立合ふて由せらるうと今のどくふ
出しぬふト思ふ由教戒の程由流流と立合ふ時の

とみご子 ▲ハテ隣に居て何れり入りのと那法あのせきさきの
とどいみ ▲ある秘大星のゆらと振ふとど那男あのとこが
何時いつ振栗と改名といやしとみ ▲ハニ改名いあわ
けとど由ゆ之振栗二年材八年といひるととどらう
那男あのとこも二年あくふゆらて来ちやア浅田の娘を祀と
かくりうを以て振栗三年秘かきねんととどらう
振栗あくり先生せんせいと名と付とど何れと肝心かんじんとどらう。アス
とんど地ちにが出来申と子候那振栗あくりも余秘寄坊あまのせきやぼう

のう月八下九

のまひまひ男おとこサ子こいら女め房むらが男おとこひてととまて女のね
まよアあるゆへ一皮ひとひ袂たもと合あ不ふ信しんて負まかさうのひみあ
まののととど小こ三年さんねんといひの候まととけりまとと
あてゆらて来てまて負まかとととまらまととわアわ人ひと子
▲然しかうサそれ更さら由ゆあいののうま禮らい品ひんととらら冷ひや方かたがね人ひとと
度ど由ゆま合あて負まかととと速はやくおひ切きて仕し舞まへばらひ
りみ又また三年さんねん追お殺ころひと出でてけい勢せい古こ不ふ信しんくか何なにの
とどらう。ア更さらて由ゆ自分おのれとと人ひとあららて来きと積つと



八十三

か世話もいろいろこの最初の試合のあつたまう
三年の終りとするところて二度目のとれも面白く
又三年のお暇で世歌か神んすつことさふあのごう
何故人性でもそつたのあつたうりまふはいてい
世話と一と私の名まで引出されて置くさふあ
獨りもありません夜で一さ味くあつてお果なされが
私の親まで立とりあめのごさ殿が三年終りと
なさればか續由三年終りとあて見まんと何ごう

いろは八下

今年度も見栄をいかりで実りつて気が據ますう
ゆとゆ必業とあまのさう人で迎由務まいと必るさ
人の口場よかりあひ止みなすつて方々宣うら
うと必るいままで子「まよは海切の口是つんふ茶厚さふ
いゆないままでが拙者の不なはほお遠いさつて居るやうで
ごさあままでをさつめのもろ芳でい今夜娘よお務す
切後と由致そりと必る免めて居りまごが師匠の
教訓うごくと幼あいつてこんまされが船ひは度務

ぞと由是まで修めと致しとのがけ身ふれり得
とりのりの修めへ由か致し連し修めと致つて
であまは負さひぬいごあませんがせろの人のたご
まあまの細なるゆいか構ひなるさるふ及びぬりサ
イやく修めの中なる物よ構ひぬか人の支でもほひと知
ません人のにぬい戸が建らぬと種なるゆいひ福
らされると才一身かふ由構ひるゆか出来ゆり由知れ
ませんゆいぬいゆの修めの中なる物よ構ひぬか人の支でもほひと知

いはハト十五

知り止るに不ぬいあるまのうらけ上の宮うござる今度
きん殿が負さひぬいごあませんがせろの人のたご
まあまの細なるゆいか構ひなるさるふ及びぬりサ
イやく修めの中なる物よ構ひぬか人の支でもほひと知
ません人のにぬい戸が建らぬと種なるゆいひ福
らされると才一身かふ由構ひるゆか出来ゆり由知れ
ませんゆいぬいゆの修めの中なる物よ構ひぬか人の支でもほひと知

いはハト十五

志賀屋の次子出、美裳と名づけ、母は憐れなせが
今姑くとして、奥子入り、何やら母く、折子入り、
半時給のせ、巻て、湯く、自後肉の出、来りし、の、今
伏もせ、今日入、来の、姓名と、大星氏とい、
さ、い、ど、も、是、ま、で、二、度、ま、で、試、合、ふ、来、て、秘、面、提、
戻ら、ま、こ、お、ん、身、が、よ、り、や、来、り、ま、ん、と、い、愛、小、由、
づ、う、あ、ん、と、笹、浪、氏、さ、入、同、乃、ま、て、入、来、の、子、細、い、何、
ぞ、ト、た、小、異、り、し、括、扱、あ、り、小、志、賀、屋、の、名、や、急、急、と、乃

と大星月影で推、あ、づ、ゆ、あ、お、ま、ま、と、あ、
い、う、ふ、由、只、今、作、の、あ、り、心、息、女、と、の、名、合、ふ、二、度、と、
不、見、と、あ、う、し、う、全、く、は、身、の、来、懸、友、と、又、三、ヶ、年、
流、り、致、せ、し、拳、の、紐、と、試、ま、う、再、之、な、が、り、推、系、致、
し、こ、お、お、ま、あ、い、ま、ら、ん、と、由、今、一、度、心、息、女、と、何、
試、合、と、致、ひ、う、ト、ま、い、せ、由、あ、く、む、冷、敷、ひ、一、慌、と、の、
りの、あ、う、ざ、れ、ば、は、世、ふ、秘、い、う、と、や、り、娘、が、欲、し、と、さ、小、
二、度、之、度、秘、と、か、い、て、由、慌、と、せ、ん、面、の、拭、て、来、る

やうな白癩な男で、運由拙者せうしやが聲こゑあつた。又い
痕むすもと立合あひあふて、和の上わの上塗ぬる。やうやうと、立て、得えら
まよ、今日けふの拙者せうしや由よし禁えん用りやうあて、お構くまひ中ちゆうに腫はる。い
お氣いきの毒どくな人ひとうな、ト、あ、る。此こゝに、辨しるべ、法はうな、つ、い、後うちの中ちゆうに
あ、る。やう、三さん年ねんの、来き、一いつ、と、れ、あ、い、不ふ、是ぜ、と、多た、う、一いつ、某なにか、ふ
酒さけまで、出い、し、て、飲の、つ、ふ、ま、ふ、い、あ、て、留とど、り、う、る。今日けふの
そ、が、う、ぞ、お、わ、ね、ト、須もと、史し、必かならず、素もと、ふ、う、俯うつむ、向むか、き、辨しる、途と、切ぎ
ま、て、居ゐ、う、り、け、る。

いろは八下十六

是こゝより、後のち、大おほ、星ほし、が、淺あ、田た、後のち、内うち、と、統と、和わ、ら、げ、て、こゝ
度どの、試し、合あ、ふ、及およ、ぶ、お、と、よ、う、人ひとの、及およ、ぶ、ぬ、法はう、及およ、ぶ、つ、が
公こうの、活かつ、連れん、る、る、の、世よ、ふ、ま、ご、あ、ら、ま、へ、さ、る、竹たけ、尾び
と、甲か、乙おつ、抄せう、録ろく、し、て、牙が、九く、編へん、の、卷まき、首くび、ふ、お、せ、い、有あ、
友とも、を、敵あひ、と、得え、く、と、い、ふ

正史 いろは文庫卷之廿四

